

高等学校における探究活動の充実に向けて (中間報告)

－進学校における総合的な探究の時間の実施モデル－

プロジェクト研究A

道内の高等学校では探究活動に対する取組があまり進んでいないことが課題となっている。そこで、平成31年度から実施が予定されている総合的な探究の時間において、いわゆる進学校が探究活動を本格的に実施する際に参考となる実施モデルを紹介する。カリキュラム・マネジメントの中核となり得る総合的な探究の時間において、このモデルのように探究の見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行えば、課題を発見し解決していくための資質・能力を育成することや、結果的に選抜性の高い大学への進学の実現に結びつくことが期待できる。

[キーワード] 探究 カリキュラム・マネジメント 育成すべき資質・能力
課題の設定 主体的に学ぶ意欲

1 研究の目的

道外には、埼玉県立浦和高等学校のように、総合的な学習の時間における探究的な学習の取組により、生徒が主体的に学ぶ意欲を向上させ、選抜性の高い大学への進学実績を上げている進学校がある。その一方で、道内の高等学校は、「平成24年度調査研究部特別委員会研究報告書」（平成25年、北海道高等学校長協会）においては、「教科と連携して問題の解決や探究活動を行う活動等が課題」と指摘されている。このように、道内の高等学校では探究活動に対する取組があまり進んでいないことが課題となっている。

中央教育審議会答申（「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」（平成28年12月21日））では、各学校が教科横断的に総合的な学習の時間の目標を定めることは、各学校におけるカリキュラム・マネジメントの鍵となるとして、次期学習指導要領におけるカリキュラム・マネジメントの重要性が示されるとともに、総合的な学習の時間の本来の趣旨が実

現できていない高等学校もあることから、より探究的な学習を進めることが求められている。

次期高等学校学習指導要領では、総合的な学習の時間の名称が、総合的な探究の時間と変更され、今後は、カリキュラム・マネジメントの中核となり得る総合的な探究の時間において、探究活動を一層充実させることが重要視される見込みである。

こうした状況を踏まえ、本研究では、大学進学希望者の多い高等学校（以下、「進学校」という。）が、平成31年度から実施予定の総合的な探究の時間において探究活動を本格的に実施する際に参考とできるような実施モデルを作成することを目的とすることとした。実施モデルによって探究の見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行えば、課題を発見し解決していくための資質・能力を育成することや、結果的に選抜性の高い大学への進学の実現に結びつくことが期待できる。

また、本研究では、札幌西高等学校と相互に連携し、具体例は札幌西高等学校の取組を参考としつつ、札幌西高等学校に本研究の情報を提

供していくこととした。

本研究は、2年研究の1年目であり、次に示す研究を行った。

2 研究のポイント

学校が探究的な学習を進めるためには、まず、全ての教職員が、全体の教育計画における個々の教育活動の意義を共有する必要がある。その際には、校内研修を実施し、学校の現状を把握して課題を見だし、学校全体で育成すべき資質・能力や育成すべき生徒像について合意形成するという過程を経ることが考えられる。その上で、総合的な探究の時間を柱として、各教科等においても探究活動の計画をするなどの方策を学校として立てていくようにすることになる。

こうした過程を踏まえ、本研究では学校が探究活動の計画立案の際に活用できる実施モデルとして、三つの資料を作成した。「総合的な探究の時間」を柱とした学力向上プランと、教科等横断的な学習の単元系統表、モデルプログラムである。なお、この三つの資料の作成に当たっては、札幌西高等学校の総合的な学習の時間における探究活動の計画を参考とした。

3 研究の内容

(1) 「総合的な探究の時間」を柱とした学力向上プラン

カリキュラム・マネジメントとの関連で、目指すべき生徒像の実現に向けて、教科等の縦割りや学年を越えて、学校全体で育成すべき資質・能力を身に付けさせる取組が難しい原因を、次の2点であると考えた。

1点目は、これまでの各教科の指導においては、教科の内容をいかに分かりやすく教えるかといったコンテンツベースでの指導が中心であったことである。

2点目は、教科の専門性からそれぞれの教科の独立性が高く、全ての教職員が育成すべき資質・能力について、共有し意識することが難し

かったことである。

そこで、全ての教職員が、学校全体で育成すべき資質・能力を共有し、継続的に意識しながら主体的に総合的な探究の時間に取り組むために、総合的な探究の時間を柱とした教科横断的な取組を見える形に可視化する必要があると考えた。そのため、可視化するために役立つ資料として、「総合的な探究の時間」を柱とした学力向上プランを資料A-1、総合的な探究の時間を柱とした学びによって育成したい力のデザインを資料A-2のとおり作成した。

(2) 教科等横断的な学習の単元系統表

学校全体で育成すべき資質・能力を身に付けさせるためには、教科等の指導に当たる教員が、当該教科等の指導内容と他の教育活動とどのように結び付くのかを意識することが必要である。そのために、今回の研究において、生徒に身に付けさせる重要な力とした「課題設定力」を育成するための第1学年における教科等横断的な学習の単元系統表の例を資料Bのとおり作成した。

表に示した内容は、現行学習指導要領解説等における、各教科等の「課題設定力」に関連のある単元を記載している。

(3) モデルプログラム

ア モデルプログラム作成の観点について

総合的な学習の時間において探究的な学習を進めるに当たって、総合的な学習の時間で求められる探究的な学習が進んでいない原因を、次の2点であると考えた。

1点目は、探究について、生徒がどのように探究学習を進めればよいか分からないことである。進学校における各教科の指導では、大学入試への対応から、知識伝達型の授業にとどまりがちで、生徒が課題を設定して探究する学習に不慣れであると考えられる。

2点目は、探究するに当たって、生徒が自ら探究したい課題を設定できていないことであ

る。

以上の2点を解決するために、本研究における総合的な探究の時間のモデルプログラムを、次の三つの観点から作成することとした。

一つ目は、教職員が総合的な探究の時間を実践しやすくすることである。

二つ目は、生徒自身が探究する価値のある課題を設定するための教職員の関わり方である。

三つ目は、生徒の主体性の育成である。

以上の観点から作成したのが、次の資料①～③で構成されるモデルプログラムである。

資料①～3年間の計画例

資料②～各学年の計画例

資料③～①及び②の第1学年に示された1つ（赤色で表示）の実践例

資料①～資料③は本稿の最後に付している。

資料①は3年間の計画例である。3年間の総合的な探究の時間の「ねらい」である育成すべき資質・能力と、活動の「概要」を資料の上部に記載している。その下に3年間のそれぞれの学年の活動を四角の枠囲みで示し、枠囲みの中に必要な時間を記入した。また、活動を示した四角の枠囲みから、活動内容や活動のねらいを吹き出しで示している。さらに、3年間の計画（資料①）と各学年の計画（資料②）において実施するために必要な時数も記入している。

資料②は、資料①の3年間の計画例を各学年の計画にしたものである。各学年における「ねらい」を示し、中心となる活動の「概要」を上部に記入している。総合的な探究の時間を柱にホームルーム活動や教科など横断的に資質・能力を育成することを意識できるような形式にしている。

資料③は、資料①と資料②に共通して記入している取組のうち、生徒の主体性を育むことに有効な実践（資料①と資料②では赤色で表示）をまとめたものである。生徒が課題を設定する際、教職員との面接を行うが、その面接におけ

る留意点などを示した。また、よい探究活動にするために生徒自らが探究したい課題を設定する必要があるが、そうした課題の設定のための方法なども示した。

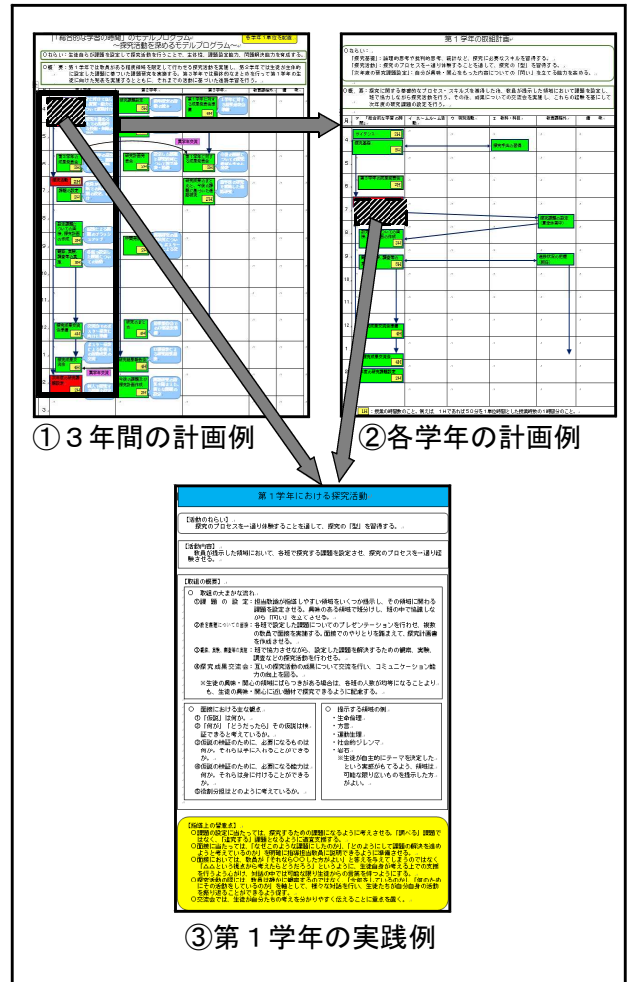


図 モデルプログラムの構成

イ 二つのモデルプログラム

今年度は、モデルプログラムⅠとモデルプログラムⅡの二つを作成した。二つの異なるタイプのモデルプログラムを示すことで、学校や生徒の実態に合わせて用いられることを意図したものである。モデルプログラムⅠは、探究活動のサイクルを繰り返すことにより、探究活動を深めるプログラムである。モデルプログラムⅡは、自ら探究する課題への意識を徐々に深めるプログラムである。それぞれのプログラムの具体的な内容は次のとおりである。

①モデルプログラムⅠ～探究活動を深めるモデルプログラム～

第1学年では、領域を限定して行わせる探究活動、第2学年では生徒が主体的に設定した課題を探究する活動、第3学年では卒業後の進路目標に合わせた進路の研究を実施する。このことにより、探究活動のサイクルが繰り返され、探究活動が学年を経るごとに深まる計画にしている。

②モデルプログラムⅡ～課題意識を徐々に深めるモデルプログラム～

札幌西高等学校の取組を参考に作成した。

第1学年では、最初に、評論文やブックレットなど量の少ない文章の要約を通して、「世の中にどのような解決すべき課題があるのか」、「論理的な文章の構造はどのようなものか」、「主張への批判はどのように行うのか」といった論理的思考力の基礎となる力を身に付けた上で、次年度、新たに生徒自らが探究する課題を設定する。

第2学年では、前年度に設定した課題について探究のプロセスを経験する。

第3学年では、卒業後の進路につながる、より具体的な課題を設定し、探究をしながら、第1学年及び第2学年の探究活動に関わり、指導や援助を行う計画にしている。

なお、札幌西高等学校では、総合的な学習の時間において、第1学年の後期に、生徒がグループごとに探究する課題を設定する取組を行っている。本研究では、その取組の様子を視察し、札幌西高等学校の実践を参考にして、本プログラムの1学年の11月から課題を設定する活動を取り入れている。

4 今後の研究について

本研究は2年間の予定で、2年目となる来年度については、新たなモデルプログラムの作成、総合的な探究の時間における評価及びその評価を基にPDCAサイクルを回すための方策について研究を進める予定である。

5 謝辞

本研究を行うにあたり、学校における取組の状況に関する資料提供や、授業の視察の受入れなどに御協力いただいた札幌西高等学校に謝意を表する。

6 参考文献等

- 中央教育審議会（2016）．幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）
- 文部科学省（2013）．今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開（高等学校）
- 北海道高等学校長協会（2013）．平成24年度調査研究部特別委員会研究報告書
- 石狩管内高等学校教育研究会（2016）．平成27年度石狩管内高等学校教育研究会報告書
- 戸田山和久（2012）．『新版 論文の教室 レポート作成から卒論まで』．NHKブックス
- 渡邊淳子（2015）．『大学生のための論文・レポートの論理的な書き方』．研究社
- 伊藤崇達（2010）．『【改訂版】やる気を育む心理学』．北樹出版
- 篠原清昭（2012）．『学校改善マネジメント～課題解決への実践的アプローチ』．ミネルヴァ書房
- ベネッセ教育総合研究所（2016）．「View21 10月」
- ベネッセ教育総合研究所（2017）．「View21 6月」
- ベネッセ教育総合研究所（2017）．「View21 8月」
- ベネッセコーポレーション（2016）．「未来を拓く 導入編」
- ベネッセコーポレーション（2017）．「未来を拓く 実践編」
- 北海道函館稜北高等学校（2014）．「国立教育政策研究所・教育課程研究指定校（総合的な学習の時間）北海道高等学校学力向上推進事業（モデル別学力向上プロジェクト）協力校（英語）Wisdom プロジェクト平成25年度研究紀要」